
GENTS THE WORLD

伝書鳩リネロサーズデイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GENTS THE WORLD

【Nコード】

N8642Y

【作者名】

伝書鳩リネロサーズデイ

【あらすじ】

三年前、世界全体で発生した謎の地震により決して交わることのない別次元の世界、こちらの世界と全く同じ大陸の南極大陸をのぞく五大陸が、この世界の海にパズルのように組み合わさり突如現れた。

今だ混乱する世界の中で、悲愴皆無…名前通りの人の域をはるかに超えた不幸な高校生

は毎日悲しい日常を送っていた。

そんなある日、悲愴のクラスに別次元から来た？という転校生、カ

ンタレラ・リネシエロ 右目には眼帯そして背中には太刀を背負った不審者ならぬ殺し屋？と不幸にも友達になってしまう。

そしてその日の帰り道、一人で歩いていた悲愴に驚きの言葉を告げられる。

「悲愴皆無、今日からお前は魔界帝国二代目の魔王だ！！」

その日をさかいに悲愴の悲しすぎる日常は一変する：そう、まさか俺がこの世界の救世主になるなんてこの時の俺は想像もしていなかった。

プロローグ はじまり（前書き）

初投稿させてもらう伝書鳩リネロサーズデイです。

この小説はスパロボのようにいろいろなアニメが参戦してくるんで興味のある方はぜひ読んでください。

プロローグ はじまり

「俺は夢の国の住人さ。」

中学生時代友人に言った半分本気のそのセリフで冷たい目で見られたその夜、俺は頭を抱えて後悔した思い出がある。

幼いころから両親に捨てられ、叔父と叔母に育ててもらった俺、悲ひ愴そうかいむ皆無は現在安いボロアパートで高校に通いながらバイトをする毎日で何とか生きながらえている。

これ以上叔父と叔母に迷惑をかけないようにと思って始めた一人暮らし：それがあきたりな一人暮らしを始める理由、だが、俺みたくに一人暮らしをしているという高校生は現在90万人を超えたというニュースを耳にしたことがある。

それはすべて3年前の世界全体で起きた地震：今では次元連結震と呼ばれているあの地震によるもの、2012年6月11日に起きた次元連結震により太平洋に北極と南極を除いたこの世界にある大陸と全く同じ形をした決して交わることのない別次元の大陸が膨大なエネルギーによりパズルのように組み合わせり突出現した：それが次元連結震である。

その次の日に世界が動き突如出現した大陸に調査団を派遣しようとしたとき、その大陸から巨大な熱源反応が感知されその熱源がまっすぐ調査団のいたアメリカの本部に高速で移動し何の抵抗もできなかった本部は数秒もせずに全滅した。

付近の監視カメラには空を駆ける20メートルはあるだろうと思われる巨大な白い人型ロボットが一機映っていて、あの大陸の文明の高さが明らかとなると同時にこの世界のものではない、別の世界から来たつまり：別次元の世界なのではないかという推測がわずかに地震発生から二日後にでてきた。

その後も、たった一機のそのロボットにアメリカ以外の世界各国に被害をもたらしたそのロボットは日本で放送されたロボットアニメ

初期のガンダムにとっても似ていたことから人々はそのロボットを白い悪魔：ガンダムと呼ばれるようになった。

このままではまずいと感じた世界政府は世界のすべての最先端の科学とたくさんの人間を使い、対ガンダム用ロボットAT直立一人乗^{アーマードルーパー}り戦車のスコップドッグを開発した。

この名前は開発最大責任者の日本人が好きな装甲騎兵ボトムズからそのままとったものだといわれその形式や武器のすべてまでもがアニメのスコップドッグと全く同じで区別がつかないといわれるほどだった。

2012年8月12日：ガンダムが現れてちょうど2カ月が経過したその日、中国に向かうと思われる途中の通過地点日本の東京都で5機のATが世界で初めて使用され、計算しつくした行動パターンそして5機の見事な連携攻撃によりガンダムの約四分の一の4メートルの大きさがなかったものの見事に勝利した。

誰もが歓喜の声を上げる中で惨劇は起こった。

ボロボロになり穴だらけになったガンダムから突如激しい光が発生し日本全体を覆ったあとガンダムは完全に活動を停止する。

最後の無駄な足掻きだと思われた行動だったが、その光を浴びた18歳以上の大人たちが次々と苦しみだし死んでいき、その日の間に人口は激減さらにそのうちの18歳以上の大人はわずか3%残り97%がすべて18歳以下の子供となり、日本は絶望的な状況に陥った。

そして様々な国からの支援で18歳以上の大人が除所に増え始めているものの、人口は今だ1000万人を超えず、18歳以下の子供は90% 18歳以上の大人は10%と今だ絶望的な状況なのである。

だが悪いことばかりではなく、あのガンダムを倒したあの日から今だ出現した大陸の動きはなくなったが、今だ油断を一切許されない状況だがそれによりATの量産+開発が進み今ではどの国でも100機を超すATを所持していつガンダムが現れても問題はない

といわれている。

こうして今は再び人類は平和を取り戻した：だが、突如現れた大陸の詳細は分かっていない。

宇宙人が攻めてきた、神が天罰を下したなど、いろいろと説はあるが一番有効とされる説は突如発生した膨大なエネルギーにより、別次元の世界と一時的に連結し別次元の大陸がこの世界に吸い寄せられた：という考え方が代表的になり次元連結震という名前がついた。でもそれはあくまでも考えであり、本当のことは誰ももわかっておらず調査したくても、未知数の力を持つあの大陸に近づこうとするやつは誰一人としていないだろう。

誰も知らない真実：今思うと俺は：いや人類みんな文字通り夢の国の住民だったのかもしれない：そう思うとなぜか嬉しくてたまらない、それならこんな悲しい俺でもかっこいいヒーローになれるかも知れないからだ：

そして、悪夢は再び人類に降りかかる。そして俺の人生は全く別の未来に進みはじめてゆく：これは、名前通りの悲しすぎる高校生悲愴皆無の物語である。

プロローグ はじまり（後書き）

説明長くてすいません…

よかったら感想をお願いします。

第一話 悲しい奴ほどよく…って言葉…ないですか？（前書き）

ついに記念すべき一話となりました。

読んでも人はたぶんいないと思うが…とりあえず書くんでは物好きな人は読んでくだ

さい。

第一話 悲しい奴ほどよく…って言葉…ないですか？

そこは、東京にある唯一の高校、白虹高校びやうこうと呼ばれる高校…その高校でいつもの朝のホームルームが始まるうとしていたのだが、今日の朝はいつもと違っていた。

教師…「えっ」と、あいさつはいいのでそのまま聞いてくれ、今日のニュースみんな見たよな？」

男子生徒A…「アカギが鷺巣編が終わっても続くってやつですか？」

教師…「うん、ちがうよ。」

男子生徒B…「じゃあ、あれですか？オリジンがアニメ化するってやつ。」

教師…「それも違うんですけど…」

男子生徒C…「分かった！！駒野がPK外したことで総理は怒ってるんですよ。」

教師…「そのニュースものすごく古いよね…せめて大津のダイビングヘッドを言っただけならいいんじゃない？ってちがう！！あれだよ！！あれ！！今朝全部のチャンネルで言ってたあの！！」

男子生徒A・B・C…「「天気予報か！！」」

教師…「ハモって言うな！！お前ら絶対わざとだろ！！だいたいお

前たちはいつもいつも…」

男子生徒A…「総理、ドラえもんみたいな怒り方はいいので早く話を戻してください。」

教師…「…：昨日の夜、前よりかなり規模が小さい次元連結震が東京で発生したってニュースだったんだが…男子生徒A…お前放課後、職員室な。」

おっと、うっかりこの教師の説明をしていなかった…この教師の名前は小泉連太郎（こい

ずにれんたろう）ついたあだ名は総理でこの学校で三人しかいない教師の一人で、のりが

よく生徒にはそれなりの人気がある二年の担任である。

男子生徒A…「えええええ！！ちよつまっ…それだけは勘弁してくださいよ総理！！」

小泉…「総理じゃなくて小泉先生だ。」

男子生徒C…「小泉総理、で、その次元なんたら震がどうかしたんですか？」

小泉…「おっと、そうだった話が違う方向に行く前に説明しないといかな…男子生徒C、職員室行き確定な。」

総理が生徒に向き直り、ゆっくり話し始めた。

小泉…「三年前からあの大陸に動きはないが、やつらは必ずまた、なにかを仕掛けてくるはず…それは昨日起こった次元連結震もその始まりの合図じゃないとも言いきれないのも確かなのが今の現状だ。」

ざわざわと、クラスがざわめき近くの人とひそひそ話をしはじめる。

小泉…「はいはい、黙ってくださいね屑ども…」

一瞬で一切の話声がきこえなくなった。

小泉…「だが、この世界もなにもせず^{アーマドトルーパー}にそれを待っているわけではない、今では対ガンダム兵器のATがどの国でも百体以上それを保持しスコップドッグを初めとするドッグ系、トータス系、マーティアル制ATなどの開発もされ対策は万全というのも今の現状なんだか、それは日本を除いた国だけ…なのも事実だ。」

クラスのみんながそれまでとは違う深刻そうな顔を浮かべ下を向いていた。

理由は明白、ガンダムから発生した謎の光によりここにいる大半の生徒の親はみんな死ん

でしまい子供ばかりになってしまったこの日本にはAT乗りがほとんどおらず130体AT

を保持している日本だが、そのうちの五体だけしか使われていない…その五体も三年前東

京でガンダムを撃破した五体でそのうちの4人のAT乗りが光によ

って死亡、実際、日

本にいるAT乗りはたった一人しかないのだ。

小泉…「そこで、日本政府は対策として47の都道府県一つ一つに必ず一校はある高校の中

から抽選で選びその選ばれた高校の授業はすべてAT関連の授業となり、高校の全生徒を

AT乗りに育て上げるといいう制度がだされ、抽選によりひとつの高校の名称が読み上げられ

た…」

男子生徒D…「!…それってまさか!!」

今までの話を聞き話の趣旨を理解した何人かが総理を見つめ立ち上がる。

小泉…「察しが早くて助かる…そう、選ばれたのはこの東京にある唯一の高校…びやうこう白虹高校だ…」

男子生徒A…「…ふ…ふ…ふざけるなよ!!」

先ほどまでふざけていた男子生徒が声を荒げて立ち上がりその勢いで椅子が倒れた。

男子生徒A…「なんで俺たちがガンダムを倒すためにAT乗りにな

らなくちゃならないんだ!!」

女子生徒E…「そうよ!! 自分たちの未来は自分で決める…なんで国に指図されなきゃいけないの!!」

男子生徒B…「もしかしたら死ぬかもしれない…俺はそんなことは死んでもごめんだね!!」

女子生徒B…「総理!! なにか言ってくださいよ!!」

男子生徒E…「そうだそうだ!! ちゃんと説明しろよ総理!!」

みんなの罵声が飛び交う…総理はただうつむくことしかできなかった…が…

???…「俺はやるぞ…」

その一言で教室は一瞬で沈黙しその声のあった方向を全員が見ていた。

???…「俺も運がいい、親が殺されても何もできなかった俺にあって大陸に復讐するチャンスがきたんだ…俺はやる!! 誰がなにを言おうと俺はあの大陸にいる奴らを片っ端から殺してやるよ。」

その声はほんとにうれしそうで…そしてとても重い一言だった。

男子生徒A…「氷道…お前なに言って…」

男子生徒F…「俺もやる!! 俺たちをもて遊んだあいつらに復讐するんだ…」

その話を聞いた生徒の一人が立ち上がる。

男子生徒G…「なら俺もやる。」

女子生徒F；「私もやるわ。」

一人また一人と次々と立ち上がり氷道という男子生徒に集まって行き、反対派の生徒と賛

成派の生徒が五分五分に分かれた。

男子生徒A…「お前ら分かってるのか！！AT乗りに命の保証なんでもない：最悪死ぬかもしれないんだぞ！！」

対立する意見この状況があとどれくらい続くのか見えない未来はある人物によって終止符を打たれる。

???…「僕たちが何とかしなければ確実に世界は崩壊するのです：ふっふ：困ったものです。」

二年のクラスメイト全員…「ん？」

???…「その少女は、この世界を自分にとって面白くないものだと思います：これはちょっとした恐怖ですよ。タンタンタンタンタンタンタン ドドドカッ
どこから…」

そこには机にうつ伏せになって寝ている男子生徒とその足元に落ちているまっがーレス、

○○○○ルが流れるiPodがあった。

小泉..「…またお前か!! 悲愴皆無!!」

悲愴..「ギャアアアアアアアア…」

どなり声で飛び起き椅子ごと後ろに倒れ頭を強打する。

悲愴..「ウツギ!! あゝ遺体…驚かせないで下さいよ総理!!」

小泉..「学校に不要物を持ってくるなど何度も言ってるだろ!!…
ついでに遺体じゃなくて痛いだ…活字でしか分からないギャグをす
るな!!」

悲愴..「えっ、あっ!!…ごめんなさい…」

漢字の間違いに気付いた俺は素直に謝る。

悲愴..「で…なんの話をしてるんですかい？」

みんな..「……………」

悲愴..「あれ?なんかやつちまたパターンのような…」

水道..「いっけゝみんな!! やつを完膚なきまでにボコボコにしろ
!!」

みんな..「了解!!」

第一話 悲しい奴ほどよく…って言葉…ないですか？（後書き）

書くのに多少時間はかかってしまいましたたがなんとか書き終えることができました

た。

感想よろしく!!

第二話 転校生はクールでかっこいい？（前書き）

ついに二話目となりアクセス数も前よりは少し多くなった今日この頃：

はあゝ：伝書鳩リネロサーズデイはこの頃絵が描けずため息をついたのであった。

わけのわからない前

書き 完

第二話 転校生はクールでかっこいい？

突然で申し訳ないが：君は不幸な人間と聞いたら誰を思い出すだろうか？いろいろな思い浮かぶだろうが、一番代表的な人物といえどある魔術にでている上条当麻あたりだと思われるが：この一帯に住む人間はみんなこの俺、悲愴皆無だと即答するぐらい俺の悲しい人生が広まっている。

それは物心つかないころ両親に捨てられたときからはじまったその人生：それはあまりにも悲しいものだった。

代表的なのが、入学式集団感染事件である。

最初の不幸で、重い病気にかかり幼稚園に通えなかった俺は小学生になることはとても楽しみで、毎日わくわくしすぎて眠れないという状況が続いた。

そして待ちに待った入学式当日、不幸にも高熱が出てしまい入学式を休むと聞いた俺はおじいちゃんたちの反対を押し切って一人で入学式に参加した。

その後、急いで病院に連れて行かれ検査したところ、これまで見たこともない症例の超感染型新型のインフルエンザに罹っていることが発覚：そして翌日、入学式に参加したすべての人がそのインフルエンザに感染、全員が病院送りにされ二カ月以上入院し最高で一年以上も入院したやつもいたらしい：当然学校はしばらく閉鎖となり、学校に行けず悲しかった反面罪悪感を深く感じながら過ごした：これが入学式集団感染事件の全貌である。

そしてそれを境に俺の不幸は一気に加速した。

小学校は毎日歩いて登校するのだが、その時に必ず車か自転車にぶつけられ毎日のように救急車に運ばれるという日々が続く中学になるまで学校に行けた例がない^{ためし}。

俺にとって通うのは学校ではなく病院というシステムがいつの間にか出来上がってしまったのだ。

そして中学に上がり始めて学校に通う喜びに浸っていたのだが、入学式は前のこともあるので参加できず、クラスからは入院生活の恨みにより人間サンドバックとなった俺は毎日半殺しにされながらもなんとか生きながらえていた。

さらに!!

氷道…「ながい!!」

その瞬間俺の横腹に氷道の両足が食い込みそのまま吹っ飛ぶ。

悲愴…「ぬがああああ!!…いったゝ…なにすんだよ連麻!!」

なにもしてない俺にいきなりドロップキックをするやつを当然無視することなどできない。

氷道…「お前の紹介分が長すぎるから、ものすごく少ない読者のために強制終了させただけだ!!」

悲愴…「えっ? 読者? なにそれ? もしかして食べれるの?」

なにを言ってるんだこいつは?

氷道…「…はあゝ、お前のバカさ加減は見てあきれるぜ…」

こいつは氷道連麻俺のたった一人の親友である。

悲愴…「なんだって、お前も成績はあまり良くないじゃないか!!」

氷道…「てめえ!! 俺の紹介分がたった一行だと!! なんかもうちよつと説明することがあるんじゃないのか!! このクソ野郎!!」

さっきから意味分らないことを言ってる氷道が次第にムカついてくる。

悲愴…「さっきから意味分らないこと言うな!! この、暴力団組長の息子が!!」

氷道…「っ…貴様!! よりによって言っではいけないことをいったな!! 悪いがここで死んでもらおう!!」

悲愴…「なにを言ってるか分からんが…そっちがやる気なら返り討ちにしてやるぜ!!」

ドゴッ!! ↑俺の顔に右ストレートが直撃する音。

ガッ!! ガッ!! ↑俺が地面に二回バウンドする音。

ドーン!! ↑壁に激突する音。

悲愴…「グッハ…つ…強い子に…会えて…」

朦朧とする意識の中で俺はゆっくり目を閉じ…

バシャーーン！↑バケツの水を水道にぶちまけられる。

悲愴…「……」

水道…「おっと、そろそろ一時間目が始まっちゃう、確か場所は体育館だったよな…げっ!! やっぱ!! んじゃ俺はおいとまさせてもらうぜ!!」

走ってその場を去る友を俺は心の底から恨んでいた。

悲愴…「俺も行くか。確か場所は体育館とか言っていたよな…」

水をかけられたことで意識が完全に回復した俺はゆっくりと立ち上がり…

???…「ちょっといいか？」

突然聞き覚えのない声が聞こえるどうやら俺を呼んでいるようだ。

悲愴…「はい、なんで…ぎゃあああああああああああああ
あああああああああ!!」

振り向いた瞬間絶叫、急いで逃げようと即Uターンし逃げようとするが…

???…「おい、ちょっと待て!!」

だが、襟をつかまれ俺は声をかけられた人につかまってしまいう。う。

悲愴…「すいません!! すいません!! すいません!! どうか命だけはお助けを…頼む!! この私、悲愴皆無を男にしてやってください!!」

観念した俺は必至に土下座&命乞いをする。

???…「いや…そんなに怖がらないでくれ…」

そうは言うものの怖がるなど言うほうが無理である。なぜかって? だってかっこよくて右目には眼帯で背中人間の背丈以上はある剣? 刀? ああ!! もうどうでもいい!! とりあえずものすごく怖い、めっちゃクールなやつみたいな話し方はするので完全なクールキアラだし今にも殺すぞというオーラが背中からでてる感じがする。

悲愴…「すい…」

「すいません!!」と言おうとしたところでちょっと考える、相手は怖がるなと言っている…もしかた「すいません!!」とか言って怖がるような素振り(そぶり)を見せたら…

俺の脳内未来予想図

????…「さっきから怖がるなと言ってるだろ!!死ねええええ!!」

背中に背負った刀? 剣? を抜き取り構え、俺にを確実に捉えてそれを振り下ろす。

悲愴; 「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

ザシュ!! ↑俺が真っ二つに切られる音。

俺の脳内未来予想図 完

うわああ!! 駄目だ!! 確実に殺される!! こうなったらなんとしても怖がってない素振り(そぶり)を見せるしかない…

悲愴…「ああ…大丈夫ちよつと驚いたただけだから…」

震える声を必至に抑え平常心を装う。

????…「…膝…」

悲愴…「えっ?」

????…「膝がめっちゃ震えてるが、大丈夫なのか…?」

悲愴「…まさか、そんなこと…ない…」

下をみると尋常じゃないほど膝が…たぶん一秒間に十回は震えている。

…終わった…悲しかった俺の人生を振り返りながら、だんだん恐れていた死が受け入れられる。

????…「あの…」

悲愴…「ああ、俺を殺すのか。さあ早く、殺してくれ。できればなんの痛みも感じない殺し方にしてほしいな。」

????…「いや、殺さないから…ちよつと聞いてくれ、お前みたい俺はたくさんの人に道を尋ねただが、お前と同じように叫んで逃

リネシエロ…「そうしてくれると助かる…そうだ!!俺と友達にならないか?そしたらお返しとかできるかもしれないしな…」

悲愴…「ああ、それくらいならお安い御用だよ」。

リネシエロが手を差し出し俺はその手を取り深い握手を交わす。

………心の中では叫んでいた、「やらかしたああああああああああああああああああ」っ…

悲愴…「で、道案内とか言ってたけど…どこに行きたいんだ?」

そんなことは表に出さず話題を変える。

リネシエロ…「おっとそうだった、二年の教室ってどこにあるの?」
ん?二年の教室って俺たちの教室じゃないか。ここに何の用があるんだ…いやな予感がするのでとりあえず聞いてみることにする。

悲愴…「二年の教室か…そこでなにかすんの?」

あくまでも平常心である。

リネシエロ…「ああ、俺は転入生で今日からこの学校に通うことになっている。」

パタリ↑俺がそのまま地面に崩れ落ちる音。

リネシエロ…「おい、どうした悲愴!!しっかりしろ!!」

意識を失う直前俺は思った、そういえば突然出てくる転校生は、クールでかつこよくとても不思議な人でその正体は超能力者かなんとかだということを…以前そんなことにあこがれていた俺を…心の底から呪っていた。

第二話 転校生はクールでかっこいい？（後書き）

こんな感じで前より長くなってしまいましたがかんばって読んでみてください。な。

あっ！！そうそう新しく書いたクソ小説ギャグガンダムってやつがあるんで、興味のある方は読んでみてください。な。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8642y/>

GENTS THE WORLD

2011年11月30日22時49分発行